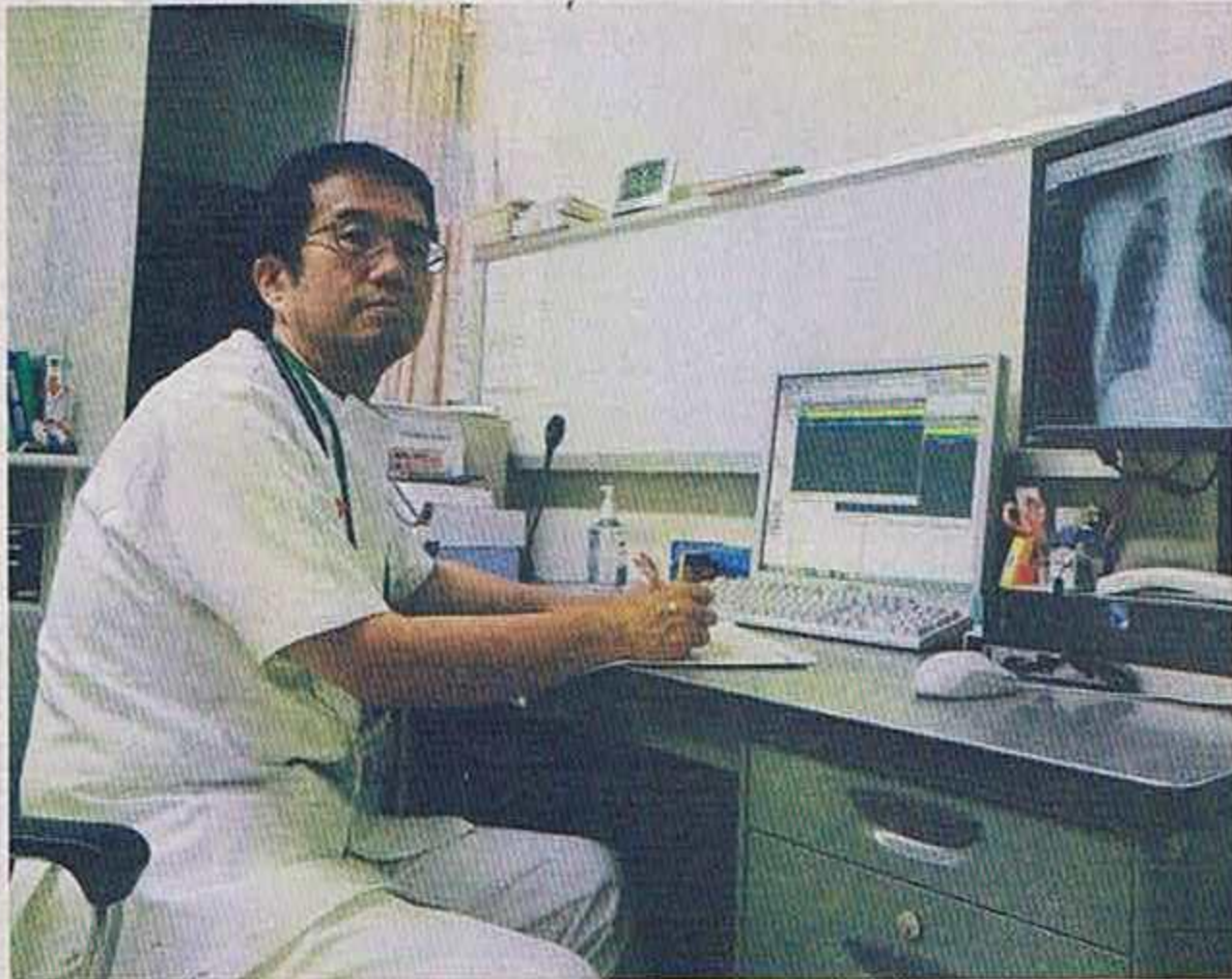


せき2週間続けば要注意

結核予防週間で呼びかけ

美浜町和田、独立行政法人国立病院機構・和歌山病院副院長で呼吸器内科の駿田直俊(するだ・ただとし)医師は(53)は、24日から始まった結核予防週間にちなみ、「結核は怖い病気ではない。しかし、感染性があるので早期発見が不可欠。せきが2週間続けば結核では?と疑問を持つことが大事。もし結核にかかれば、薬を正しく飲み続け、若い人は規則正しい生活を」と呼びかけている。

和歌山病院



「結核予防は早期発見を」と話す駿田副院長

結核は《昔の病気》のイメージが強いが、県のデータによると、今でも全国で年間約2万3千人が結核にかかり、約2千人が死亡している。県内では昨年1年間で新登録患者数は234人。人口10万人当たりの罹患率は23・5で、全国ワースト3位。ここ10年ほどはほとんどの年がワースト10以内に入っている。患者の68%は70歳以上のお年寄りだが、0〜20歳代でも7人がかかっており、若者といえども決して油断は出来ない病気と言えよう。

駿田医師は、和歌山県の罹患率が高いことについて「県内は他県に比べて衛生状態が良くない訳でも

栄養状態が悪い訳でもない。ただ、体力が弱ったお年寄りが結核菌に接すると発病するケースが多いので、せきが2週間以上も続いたり、タシがよく出る時は早い目に医者にかかることが大切。ふだんよりご飯を食べる量が少ないとか体がだるい、元気がないなどの症状が見受けられた時も要注意」と指摘する。

和歌山病院は、県内で2カ所の結核指定病院になっており、院内に20床の結核専用ベッドを確保しているが、最近10〜13床がふさがっている状況で、結核が現在も発症していることがわかる。

駿田医師によると、結核菌は感染力が強いため、他人に移る恐れがあるので、開業医は、すでに周知のハズだが、結核患者が発生した場合早急に保健所へ連絡してもらえようと呼びかけている。

最近若い人も結核にかかるケースもみられる。日頃は元気な若者であって

も、睡眠不足や偏った食事の繰り返しなど不摂生が続いて体力が弱っている時に感染すると若くても発病することがある。当然のこととはいえ、規則正しい生活で健康を維持しておくことが、たとえ結核菌に感染しても抵抗力が発揮されて感染せずすむという。

肝心の治療法だが、万一、結核になった場合は、医師から服用された薬をきちんと飲むことが大事。さらに薬を飲み始めたら半年〜1年ほどは休まずに飲むことが大切という。

駿田医師は「結核は50年ほど前の怖い病気ではなく、現在は完治する病気なので怖がることはありません。ただ、空気感染するので自分が予知しないうちにかかることがあるので、生活状態に気を配るなどふだんから規則正しい暮らしを心がけてもらえれば」と話している。